＜資料文献コーナー＞

『きょうだいの育て方　日本流・カナダ流　文化心理学で読み解く親業』
エイムズ唯子著　同時代社

本誌連載コラム「心理学の周辺」でおなじみのフォーラム共同研究者エイムズ唯子さんが、『きょうだいの育て方　日本流・カナダ流　文化心理学で読み解く親業』を出版されました。今回は、瀧口典子と下田由佳の二人の視点から紹介します。

「エイムズ唯子ワールド」へようこそ

瀧口　典子

まず、表紙の絵が楽しくて素敵！思わず手にとってみたくなる。

「はじめに」は、いきなり『源氏物語』の引用から始まる。源氏の孫たちをめぐる場面を現代の子育てと重ねての叙述に、おもしろそうとエイムズ唯子ワールドに惹き込まれていってしまう。そして本の最後には「寅さん」も登場する自由奔放な「家族」論である。

しかし実はこの本、著者のカナダ・ゲルフ大学大学院での博士論文を基にして、「子育てのかたわらにも置いていただけるような読みやすい本」として書かれたものである。

第1章「きょうだいを育てる」ということ
第2章　親によるきょうだいの社会化―日本の場合
第3章　親によるきょうだいの社会化―カナダの場合
第4章　まとめ―日本とカナダの「きょうだいの育て方」を比較する

「早く結論を知りたいということなら、まよわず第２章からお読みください」と著者が書いているが、私は、第１章も興味深く読ませてもらった。世は「心理学」ブーム、科学が進歩しても解けない人間の心を読み解いてみたいという願望があるのだろう。私もかつてそうだった。しかし残念ながら、見事に裏切られた。大学の「相談室」のカウンセラーは心理学の専門家だったが、大学生の私の悩みには応えてくれなかった。アンケートや統計、動物実験などで数量的データを積み重ねても、これで人間の心がわかるものかしらんと、懐疑的になった。でも「文化心理学」って、どうやらそうではないらしい。第１章は、エイムズさんが「文化心理学」に出会い、博士論文を完成するまでの模索、いわば

研究遍歴。エピソードとともにエッセイ風に語られているから、おもしろい。

さて第２章～第４章は、いよいよ４０人の日本人と３８人のカナダ人からの膨大で詳細なインタビューの分析と比較。親たちの語りの中からよく「流れの底に潜む特別な小石」（キーワード）を拾い上げたことと、感心してしまう。まさに、「詳細なインタビューをデータとして、その分析からオリジナリティーの高いミニセオリーを導き出す質的研究の面白さをコンパクトに示す、ひとつのサンプルづくり」「心理学の既成概念を脱却して、ダイナミックに新しい地平を切り開きつつある文化心理学の可能性をきょうだい関係というテーマのもとに描き出す」試みである。

３人の母親で元教師でもあった私は、第２章にはかなり辟易し、むしろ第３章にとても共感したというのが正直なところである。

私は自分の子どもはほっといて学校で高校生を追いかけて走り回っていたから、面倒見のいい優しい母親になれず失格だとどこかで負い目を抱いていた。だから、カナダの「here」「there」に納得、安心した。

夜、家庭訪問に出かけるので「悪いけど夕飯は〇〇屋から好きな物を取って食べてね」と言う私。子どもたちは内心「やった！」と喜んだそうだ。親の居ぬ間に、好きなテレビをつけて好き勝手に過ごせるのだから。

しかしそうは言いながらも、この本を読みながら、自分のどこかに「古い日本の家」の体質が見え隠れする。二人のお兄ちゃんたちと違って、妹である娘には厳しくあたった時期もある。やがては他家に嫁にゆくのだからと「ちゃんと躾け」たくなる自分の性(さが)に悩んだ苦い思い出が蘇える。

最後に気がついた。実は、この本、エイムズ唯子さんの自分史が散りばめられていて、興味深い。そんなところにも、大きな魅力があるのだと。

かつての子どもとして、自分のルーツを探る

下田 由佳

人が価値や規範などを含む、社会のことわり（理）を身につけるプロセスを、社会学や心理学の言葉では「社会化」というそうです。本書では、子どもの社会化の担い手である親が、幼いきょうだいをきょうだいとして育てる過程を日本とカナダの親たちへの聞き取り調査から具体的に紹介し、文化心理学の考え方によって比較・分析しています。

エイムズさんは、「養護性」「ケンカ」「公平性」「互恵性」「責任」という概念のセットを日本とカナダの両国に共通する枠組みとし、聞き取り調査をする中で、日本・カナダの親たちによる「社会化」において、それぞれに共通するキーワードを見つけます。日本では、「一緒」「同じ」「譲る」「我慢する」。カナダでは、「ヒア（here）」「ゼア（there）」「ホーム（home）」「ボンド（bond）」「テイキング・リスポンシビリティ（taking responsibility）」「ディーリング・ウィズ・プロブレムズ（dealing with problems）」。

日本の育て方については、上記のキーワードを見るだけで、親の立場から、あるいは親から「社会化」されて育てられた経験からなんとなく想像がつくと思いますが、いかにも日本的だと思いませんか？（オランダの学者ホフテートによれば、日本は集団的で相互依存を前提としているのに対し、北米の文化では個人主義的で独立独歩を旨としているのだそうです）。「みんな『同じ』なんだから『我慢して』『譲って』『一緒』に仲良くしましょう」、みたいな。とても平和的な社会化ですが、みんなと同じで一緒にただ黙って我慢をし、譲るだけでは解決できない事態が現実にはたくさんあります。

カナダの親たちの育て方の中で、日本のそれと大きく違うのは、テイキング・リスポンシビリティ（責任を引き受ける）とディーリング・ウィズ・プロブレムズ（厄介な問題を解決する）です。私はこのディーリング・ウィズ・プロブレムズを日本人、特に自分に足りないことだと感慨深く読みました。何か問題にぶつかった時に、問題解決能力もさることながら、否定的な感情をコントロールすることは大人になってからとても重大で、生きにくさを感じている自分に足りない能力だと最近強く感じていたからです。また、問題が起こった時に、いかに冷静に自分の意見を伝えられるか。そのあたりのことが日本人に足らない能力（スキル）だと思いました。

フォーラムの運営委員会で時折、政治の問題などが話題にのぼり、「若い人たちはどう思っているのだろう」という流れになります。運営委員の中では「若者」の私と長谷川さんにも意見が求められるのですが、毎回困ってしまいます。感じていること、考えていることはいろいろあるのですが、頭の中にあるジグソーパズルのピースのような思いを瞬時に形ある言葉として適切に変換し、相手に伝えることができないのです。

『きょうだいの育て方』を読んで、（「親」として「教員」として子どもたちを社会化してきた運営委員が多い中ではあまり大きな声で言えないのですが）、意見が言えないのは親や学校教育による「社会化」の結果なのではないかと、気持ちが少し楽になりました。学校教育でも教科書の中身をインプットさせるばかりで、アウトプットさせることを学んできませんでした。

私は自分のルーツを探るように読んでいったのですが、子どもたちの社会化に関わる人に読んでほしい本です。カナダ流の育て方の良いところを日本でも取り入れてほしい…大人になってしまった子どもからの思いです。